

# 鎌倉ノートからみた「琉球芸術調査」(2)

久貝 典子

## はじめに

本稿は『沖縄芸術の科学』第27号収載の拙稿「鎌倉ノートからみた「琉球芸術調査」」の続編である。前号拙稿に引き続き、鎌倉芳太郎ノート資料(以下「ノート資料」「ノート」と略記する)81冊の調査内容がほぼ該当する第1期後半(1923年前後)から第2期(1924年5月-1925年9月)、第3期(1926年4月-1927年9月)までの中から日付入りの記事のみを集積し、ノート作成のより正確な日付と出来事、起こった場所ほかについて概括したものである。集積したデータは「資料 ノートにみる鎌倉芳太郎の足跡」【表B】(第2期)・【表C】(第3期)として本文末に掲載した。また、本文ではノート番号を[]内の数字で表し、マイクロフィルム番号を[]の後ろの数字で表した。

例：鎌倉ノートNo.1の61頁→[1]61

その他、敬称は略した。

## 1. 伊東忠太との共同調査

### (1) 琉球芸術調査以前

第1期以前、教師の職を離任した琉球芸術調査以前の期間について、鎌倉の転機となった重要な出来事が幾つかあるので整理する。

ノート [23] 28まで「毛姓世系図 支流」を书写した資料を収録(【表A】49)、そのあとの [23] 49までは、帰途の記録(【表A】50-57)や『中山世譜』『琉球沿革史』『琉球入貢紀略』などの抄写・狩野芳崖研究が続いている。

帰途の旅は、4月18日午後3時那覇港を出発することから開始。19日午前7時半名瀬着、午前8時半同地から鹿児島へ出発し、翌日午前7時半鹿児島へ着ている。鹿児島では鹿児島県立第二師範学校へ寄り、同日午前11時半薩州館<sup>1</sup>に到着(【表A】51)、21日宮崎で幾人か<sup>2</sup>と合流している。その後宮崎-福岡を

經由し、5月1日東京に到着。東京美術学校研究科（美術史研究室）入学は同日行われたようで、研究科では正木直彦校長から東京帝国大学教授の伊東忠太を紹介された（【表A】58）。

伊東は当時すでに近代日本の建築界に大きな業績を残した巨人であり、多方面において鎌倉に影響を与えている。その一端は、後年伊東と共著で刊行した『世界美術全集』『南海古陶瓷』で確認することができる。

鎌倉と伊東の交流は、美校校長の正木直彦を介して始まる。鎌倉は伊東の元へノート資料ほか一切を持参し披露、その資料をみた伊東は「多大な感興を覚え」（伊東 1926：P439）、鎌倉とともに琉球芸術の研究に従事することを決めた。また、鎌倉は伊東と知遇を得ることで、首里城取り壊しの中止、後の「琉球芸術調査」へと活動が急展開した。

首里城取り壊しの中止の概略を記す。帰京後の1923（T12）年6月<sup>3</sup>、鎌倉は小石川区茗荷谷にあった沖縄県学生寮に行き、新聞に目を通したところ、近々首里城正殿の取壊式を行う記事が目に入る。驚愕した鎌倉は伊東忠太の元へ駆け込み、記事の内容を伊東に告げる。伊東は即座に内務省へ連絡、早急に取壊しを中止させた<sup>4</sup>。この出来事は尚家の人々を感激させ、特に野嵩御殿<sup>5</sup>は、鎌倉の調査研究について全面的に協力することを約束するなど、両者の迅速な対応が後のフィールドワークに最良の条件を与えた。また伊東は、琉球を訪れる前に鎌倉に伴われて東京の尚侯爵家を訪ね、同家において数々の「古琉球の芸術品を観覧し…琉球出身の東恩納文学士及数多の琉球研究家に会見」（伊東 1926：PP440-441）しているが、この尚家からの歓迎も、首里城取り壊しを中止させたことが功を奏したためである。

「琉球芸術調査」については、伊東が財団法人啓明会に諮り、承諾を得た。同調査は1カ年3000円の研究費が決まり、鎌倉・伊東共同名義で調査事業が始まった。

伊東は大正13（1924）年7月25日東京を出発した。同月28日鹿児島を經由して31日那覇へ到着、調査期間は7月31日-8月20日まで。以上が旅程である（【表B】85）。

離沖する8月20日まで、出迎えでは「埠頭には沖縄県庁首里市役所の官公吏員諸氏、尚侯爵家新聞社の人々鎌倉君等10数名が迎え」という大歓迎をうけ

(伊東 1927 : P448)<sup>6</sup>、滞在中も多くの著名人と交流しながら、マラリアと台風  
に苦しめられつつ精力的に本島各地を視察するという日程をこなしている。

## (2) 伊東忠太の琉球視察

伊東忠太は1967 (K3) 年、山形県米沢の米沢藩医を輩出した家の二男として  
誕生、叔父に平田東助 (貴族院議員)、遠縁に東京美術学校日本画科の平田松  
堂がいた。幼少の頃より画才があり、長じて東京帝国大学工科大学造家学科へ  
入学、大学院は日本建築史を専攻した。「法隆寺建築論」(1894)<sup>7</sup>を提出、工学  
博士となる。明治26 (1893) 年東京美術学校講師となり<sup>8</sup>、1902 (M35) 年から  
3年以上をかけ中国・インド・エジプト・小アジアの国々・ヨーロッパ各地の  
踏査旅行を敢行したことは有名である。鎌倉と知り合った当時の伊東は既に「丁  
度本年限りで大学の方を60歳の定年で引くことにしている」(鎌倉 1982 :  
P276) 時期で、日本の建築学界を牽引する大家となっていた。

鎌倉から資料を提示された当時、伊東は琉球に関する情報を殆ど得ていな  
かった。伊東自身の述懐では「馬琴の弓張月を耽読したお蔭で、頭の中に小説  
的な琉球が思ひ浮かぶ」程度、識者に尋ねてみても「琉球は石原小石原」、芸  
術的な文物に関してみるべきものはないと聞かされ、半信半疑ながらも鎌倉の  
研究資料をたよりに琉球芸術調査のため来沖したと記されている。

つまり伊東は同調査の名義の代表者・指導者的立場であるが、沖縄に滞在し、  
実際に調査の中心となったのは鎌倉である。しかし伊東が「琉球芸術調査」の  
最適な理解者であったことは間違いなく、鎌倉と伊東の共同事業が相乗的とも  
いえる作用をもたらした。

伊東は「琉球紀行」と題し、沖縄滞中の見聞を著書『木片集』の中で紹介し  
ている(【表B】36)。伊東の視察にはほぼ県職員が同行し、日付に関しては明  
記されていない。従って特定はできないが、県庁の末原学務課長ほか1名が随  
行、伊東は凡そ次の箇所を見学している。

尚順邸・首里城・園比屋武御嶽・弁が嶽・円覚寺・玉陵・末吉宮・天久宮・  
安里八幡宮・沖宮・普天間宮・天尊廟・三重城・御物城・今帰仁城・識名園・  
浦添・中城など

伊東は画才や地図を描く才能に恵まれ、一覧表(データベース)作りを好ん

だ。「琉球紀行」では、琉球全図や円覚寺・崇元寺の平面図、琉球の庭園のイラストレーション、守礼門・首里城正殿その他の写真を所々に挿入し解説、琉球王朝一覧表を作成し解説するなど、伊東らしい報告が為されている。また、同書「30 講演会」の項では、県学務課主催の講演会（女子師範学校）で、琉球建築・琉球芸術について講話した旨をレポートしている。内容については同年9月東京美術学校で行われた「琉球芸術展覧会」の講演会での講話に連なるもので、

- ①琉球建築の分類…宗教的か、非宗教的か
- ②4つの特色…古調を帯びる、おおらか、特殊の趣味（個性的）、日本・中国・安南・朝鮮等からの感化

という内容の講話であった。琉球芸術研究の重要性を述べ、県内では保存・研究・振興の各方面において尽力を願うと結んでいる。

### （3）伊東忠太と鎌倉芳太郎の共同研究について

伊東忠太は東京帝大工科大学へ卒業論文「建築哲学」を提出（1892）、大学院へ進学し、東京美術学校で講師として「建築装飾術」を講義する。東京美術学校では、岡倉覚三（天心）、黒川真頼らが美術史・工芸史を担当しており、鈴木博之は「彼らから伊東が、日本美術の通史的体系の見通しを得たことは十分に考えられる」と指摘する（（鈴木 2003：P12）。伊東はその後岡倉、黒川らとともに1900（M23）年、帝国博物館編纂の『稿本日本帝国美術略史』の執筆者として参加。「建築之部」を担当した伊東は、結果として日本の建築史学を成立させた第一人者となる。同書で伊東は時代を8つに区分、後年の建築史の時代区分に影響を与えた。建築家としては平安神宮（1895）・伊勢神宮司庁（1903）ほか多数の神社の復元事業に携わった。

鎌倉の研究も、①古代日本芸術の歴史に対する関心、②ルーツをアジアに求める発生論的思考、③比較研究的視点という点で伊東から影響を受けている。

大正15（1926）年9月5-7日、啓明会主催『琉球芸術博覧会』「講演会」が東京美術学校で開催される。伊東は「琉球芸術の性質」、鎌倉は「琉球美術工芸に就きて」と題し研究成果を発表、両者の発表はおおよそ次のとおりまとめられる。

伊東の発表は、芸術は「国民」と「国土」の二元の要素から成立し、琉球芸術の「国民」は大和民族、「国土」は沖縄の小さな島々である。しかし重要なのは狭い土地ではなく大きな海にあり、琉球の芸術作品は東アジア・東南アジアとの交流によって日本の古い様式を残しながら全て支那（中国）と日本の中間を示し、おおらかな特徴がある。一方鎌倉は、琉球の芸術を「純粹芸術」「応用芸術」に区分し、絵画・彫刻を「純粹芸術」に、漆工・陶磁工・染工・織工・刺繍工・金石工を「応用芸術」に細分し、各部門の歴史をまとめ、全体としては伊東が総論、鎌倉が各論を担当している。鎌倉は、その後も伊東の歴史観を概ね継承し、沖縄の物質文化は、古代日本の影響下にあった「古琉球時代」<sup>11</sup>以後に成立した琉球王国時代に、本土系とは異なる東南・東アジアなどの文化の影響を受けたと考察している。

両者の視点は、近代化・国際化を推進する当時の時代性を反映させている。つまり、由緒ある歴史をもつ「日本」という国をアジア史の中に位置付けることにより、日本の国際的アピールに貢献したいという、近代知識人の視点が両者に認められる。

昭和4（1929）年2月、平凡社より『世界美術全集』全36巻が出版され、伊東忠太が第21巻の「琉球芸術総論」、鎌倉芳太郎が「琉球美術各論」を執筆担当した。伊東は「琉球芸術総論」の中で、アジア・ヨーロッパ踏査などの経験で得た比較研究的視点から、琉球芸術は日本・中国・朝鮮等の影響を受けながら独自の発達を遂げ、しかも島嶼なので古いかたちを残していると説く。一方鎌倉は、ノートを駆使した様子がみえ、伊東の総論を補うかたちで詳細に各論を論じている。両者とも啓明会での講演会の内容とほぼ変わらず、①～③項をまとめている。

同シリーズについて概観すると、16-18世紀ころまでの西洋から東洋の美術をカバーし、目次はスペイン・オランダ・フランスの絵画やバロック・ロココ建築・17世紀の西洋工芸・朝鮮時代後期の次に琉球芸術総論・琉球美術各論・徳川時代の建築という並びになっている。その中に琉球芸術（美術）論を2本並べたのは画期的または異例ともいえる配置である。

琉球芸術は、基本的には古代日本の文化を多量に摂取しつつ、アジア諸国の影響を受け「一種特別の芸術」（伊東 1929：P19）となったと考察する伊東と

鎌倉は、伊波普猷のおもろ研究や「P音考」にみる言語学的研究の成果、『古琉球』等の著書に依拠し、古琉球時代、日本史でいうところの室町時代頃まで琉球芸術の源流が遡れると考察、オモロや古謡に、古い日本に連なる琉球芸術のルーツを見出そうとした。しかしオモロや古謡は詞章（文学）であり、詞章の世界観を物質文化研究の一分野である美術工芸史研究に転用することは論理の飛躍を招く危険がある。例えば、オモロには日本の『万葉集』と共通する「権威」「伝統」「格式」「宗教性」「神秘性」という抽象的イメージに表象される世界観がついてまわるが、その世界観を引用し、古代日本の中の琉球芸術の歴史（史実）としてどうまとめるか、という矛盾の発生が予想される。また琉球史そのものが日本史の枠内に収まったと断定できる現状になく、琉球芸術は確かに中国や東南アジアの影響を受けてはいるが、琉球芸術と東南アジア芸術との比較研究や編年については、研究が余り進展しておらず実証されていないなど、問題点が多々ある。両者の論点は、そもそも琉球芸術の源流が日本の様式に連なるということを文獻的・年代的に実証するのは難しいという根本的なアポリアを抱え込んでいる。

しかしながら、「大型写真機とノートを手にして首里、那覇をはじめ、沖縄本島各地を駆け巡り、更に先島の果てまでも波濤を越えて渡り」（鎌倉1982：P2）短期間に行われた「琉球芸術調査」は、太平洋戦争で多くの資料が焼失・散逸した沖縄県において、今や各種の復元事業の資料として不可欠なものとなっている。

イラストレーションによって文章の説明を補う、という表現手法についても、伊東は鎌倉に影響を与えている<sup>12</sup>。伊東は自ら画家になりたかったと述べるほど絵を描くことに熱中した。『阿修羅帖』全5巻（国粹社：1916）では、西洋や東洋の寺院建築にみえるような奇妙な生き物、想像による怪物などが幾つも描かれている。伊東は、設計した建築物にそれらの怪物像を守り



写真1. 伊東忠太の描く想像上の生き物  
（『木片集』背表紙より）

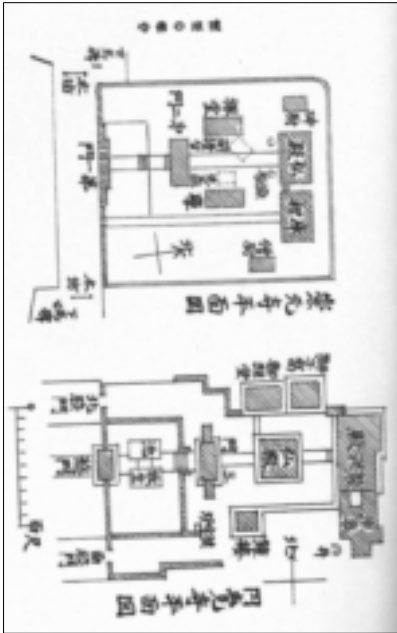


写真2. 伊東忠太の描いた平面図(『木片集』p. 500)。「円覚寺」は鎌倉が『沖縄文化の遺宝』p. 113で使用。

神のように配置させるなど、独創的な美意識をもっていった。鎌倉は、伊東のイラストの効果的な用い方に影響を受けている。例えば鎌倉の拝所や御嶽のイラストには、平面図や側面図、あるいは鳥瞰図が幾つも存在する。『木片集』より、伊東の平面図を掲載する(写真2)。

鎌倉の [13][15][17][18][19]には、写真撮影禁止・写真表現不可能な場所の素描に文字で記録が書き込まれているが、イラストの描き方には、建築設計図や地図的要素も取り入れられ、伊東の影響が認められる。これら資料の多数は、写真記録が保存されていない現状で、文字記録以上に重要なものとなっている。

#### (4) 関東大震災とダ・ヴィンチ

[23] 51-[23]52までの短い頁であるが、鎌倉は、関東大震災<sup>13</sup>を体験した時の生々しい記録を綴っている。長文なので所々省略し、引用する。

千九百二十三年九月一日正午前八分の頃だ。/コゝまで書いて来た時地震がひとゆりきたー又きた。大地震だ！ 私は外に飛した。皆でて来る。青山さん。吉村さん。……/大きな不安だ。私は松の数本ある そして小藪の上に座をとつて腰を下ろした。(省略) …/ゆれる。ゆれる。たまらなくゆれる。(省略) …/ロダンの黄銅時代(ママ)が壊れましたよ。と誰かゞ云ふ。一万円で売約済みになつてみたものだと誰やらがいふ。私は考へた。名作もそれは大自然の偉力の前には何の力も持ちえないのか。そして人間の假定(ママ)した百般のものはその宇宙の必然の前には何の支ふる力もないのだ。(省略) …文庫の中の壁はこはれる。戸棚は倒れる。古代の偉作は破壊されつゝある。/章展製作

の画輯をもつた□氏は青くなつて事故の運命の展開におのゝいてゐる。/彫刻の製作は余程倒壊したらうと云ふ吉村さん。私は。私は。/只考へて。そして生きたいと個々の深奥の叫びを見つめてゐる。/どうなることか。生きたい。生命の欲求は只それのみだ。(以下省略)

日記は当日午後2時10分記載とあり、震災後、11月頃まで東京を離れた鎌倉は、奈良・京都の古美術研究に一時従事、その後関西より帰京し、11月6日美術学校へ戻った。

[23]52では、冒頭にLes Manuscrits de Leonardo da Vinci de La Bibliotheque Royale de Windsor (ウィンザー城王室図書館所蔵『解剖手稿』)、De L'Anatomie Feuilletts (『解剖学ノート』)という2冊の書名がラテン語で記されている。これらはいずれもレオナルド・ダ・ヴィンチの解剖図などで、鎌倉は東京美術学校の「文庫に入り」それらの図を目にする。

…レオナルドの解剖図の写真を見た、素敵だし/とても美しい、大きな秘密の理解者だと思つた。私も理解の梯に立つことを当然のやう/な傾向と考へた、とてもよかつた…

関東大震災の衝撃から徐々に立ち直り、レオナルドの世界観に共感した鎌倉が「ほんとに勉強しよう」と決意を新たにする ([23] 52)。再び創作や研究の意欲を昂揚させた様子が伝わる記事である。

[21]490にみる「首里那覇 (云々、以外) 二於ケル未婚者ノ入墨」は、伊波普猷がドイツにおける唯一の南島研究者と呼んだエドムンド・シーモンの入墨図を模写したもののだが、[21]500・501・504・505などは入墨図とともに解剖図風の人体図が描かれており、レオナルドに私淑する鎌倉らしい図となっている。つまり、鎌倉の入墨図に人体図が併記して描かれているのは、レオナルドの人体図や解剖図の影響によるものであり、鎌倉のイラストが精密かつ複数の要素で構成されているのは、伊東忠太、レオナルド・ダ・ヴィンチほか、鎌倉が直接的・間接的に習得した芸術表現を結集させて描いたためである。

## 2. 第2期

### (1) 写真技術の本格的習得

写真については、鎌倉は第1期からその重要性を理解していた。八重山桃林



寺調査の際には崎山用宴が主に撮影を行ったが、首里に戻ってから帰郷までの間、末吉安恭から紹介された小橋川朝重と共に写真を撮影している。例えば、[25] 379には、3月28日の日付と「午前10時小川写真館ニテ撮影-尚順男（爵）」のメモ（「爵」は筆者付加）があり、

- a. 慎思九筆 松下高士之図
- b. 吳着仁筆 春景山水之図
- c. 庚午秋球陽首里殷元良写 夏景山水之図
- d. 神猫之図
- e. 毛長嬉筆 孔子像
- f. 自了筆 帰去来之図

と撮影の対象物の記録をとっている。

1回めの「琉球芸術調査」事業は、第2期から本格的に始まるが、その前の東京での活動は【表B】69-71で確認できる。鎌倉は、3月15日に啓明会からの補助が決定後、当時のドイツ製カメラ、ダゴールデッハ（ダグレオタイプ・カメラ）を購入し、写真科教授の森芳太郎から本格的な指導を受けている。

[24] 104には、〔写真術要綱〕が載っており、それには次のように写真技術の獲得計画が記されている。

(準) = 準備

(1) = 乾板について / (2) = 露光前後 / (3) = 現像撮影 / (4) = 定着 / (5) = 水洗

(A) = 印画紙について / (B) = 光源 / (C) = 焼付 / (D) = 同 時間 / (E) = 現像 / (F) = 定着 / (G) = 水洗

(特) = 特別操作

[27] の「写真日記」には、写真技術の練習を、1924年6月28日より初めて着手する（【表B】82）という記録があり、[24] の〔写真術要綱〕に従い、首里市役所に高嶺朝教市長の許可を得て設置した暗室で試行錯誤を繰り返した様子が詳述されている。「—あらゆるものゝ完成は自ら信ずることにある—」（[24] 104）、自らをそう鼓舞し、現像実験に明け暮れた様子は、日付・フォーカス数・露光時間・撮影時刻・撮影したもの・撮影場所その他書き込まれたメモで確認できる。

（6月）29日夜、アゾ紙の試験焼する。然し乍ら光量不足のため1枚も成功せ

ず」([24] 18)。8月22日…(省略)…本日ハ大作ニ於テ成功シタルガ如シ」([24] 19)

など、技術取得に四苦八苦している様子が窺える。この苦労によって得た写真資料が、1971・1972年の写真展、さらに『沖縄文化の遺宝』刊行へと繋がり、国の重要文化財となった。

## (2) 鎌倉の紅型研究

「型付伝来の起原を研究するは面白しき<sup>(ママ)</sup>ものなり」([24] 163)。これはノートに残された言葉である。II-1で既述の通り、日本画技法に精通していた鎌倉は、ごく自然に、紅型に対する関心を寄せていった。関心は当然早く(第1期)からあったが、本格的な聞き取りや技術を習得したのは第2期以降のことである。

紅型の研究・技術習得とは、鎌倉にとり、琉球芸術調査事業の中でも特に興味が湧くもの、戦後は生計の助け、または作家として全国的認知を得るに至る重要なスキルであった。1974(S48)年国の「重要無形文化財保持者各個人認定(型絵染)」を受け、型絵染(紅型)作家としても第一人者と周知された鎌倉はまた、日本工芸会理事として紅型の保存や後継者育成に助力した。

1924(T13)年夏の大島調査のこと、大和弥一郎宅で大和浜のろの羽二重地筒引糊置色差の胴衣を、さらに久米島に渡って菊花鎖文絹地型付胴衣をみせてもらう。鎌倉は、これら資料により、紅型の技法が琉球に伝わったのは明代の中期(15C)と推定する。そして紅型職人の家系で最も古いといわれた大沢岬を探しあて、『浦添型見本帖』を入手する。また、1924(T13)年5月7日、「カタツケヤー(katatsukiya)を尋ねることにした」(【表B】73)という記録があり、その「カタツケヤー」である久米町在住の紅型職人、城間栄信・城間栄光を訪ねている<sup>14</sup>。

訪問した知念家・城間家は紅型三宗家<sup>15</sup>と呼ばれる形付職人の家系のうちの2家である。これらの家系は代々形付職人であった。鎌倉は城間松より聞き取った事柄を「染物仕事」(『古琉球紅型 第二期上』京都書院:1969)としてまとめている。同資料では、城間松より顔料を用いて紅型の染料作りを伝授された様子が窺える。一部引用し、技術習得の様子を概観する。

…帯紫紅色の腥臙脂の原色を現わす時には、下塗は濃淡いずれも胡粉で不透明の具入りにし、下塗りはその透明原色を使う。その濃い色を「ぶき」(Buki)と呼び、具を入れた腥臙脂を重ねて塗り、淡い色を「ひぐ色」(Figuiru)、地色では「はないる」(花色) (Fanairu) と言ひ、胡粉の具入れは「ぶき」より多量にする。腥臙脂を使う紫系にも二種あって、一つを「むらさち」(Murasachi) と言ひ、藍の花 (Ye nu fana) (藍蠟)に少量の具を入れたものを下塗りし、透明腥臙脂の濃いものを数度重ねて塗って適宜の色を出す。一つは地色で「ぶどういる」(葡萄色) (Budwu iru)、模様色差では「ちちよう」(桔梗) (Chichou) と言ひ、下塗りは具入り淡墨で、上塗りは具入り腥臙脂である。

前掲資料「 」は色の方言表記、次の( )は方言音表記、さらに標準語の呼称があればそれも列記している。[24]と比較すると、前掲引用の「 」内の色名は、それぞれ「ショウエンジ」「ボケ」「ハナイル」「フィグ」など、色名がカタカナの方言音表示で記されている。したがって [24] が『古琉球紅型』の一次資料として用いられていたことが確認できる。鎌倉がいかに関言研究にこだわっていたか理解できる例であると同時に、紅型技法の本格的体得に果敢に挑戦している様子が伝わる。これら資料蒐集・技法伝授の成果は、啓明会の主催する第28回(1928)の講演会に於いて「琉球染色に就きて」と題し発表され、鎌倉は紅型研究の第一人者として認知される。

ところで、[24]には鎌倉の次のような感想が記されている。

カタツケヤー (katatsukeya) を尋ねることにした。二軒目の城間で古いものにありつく。気持ちのよいものである。研究のいと口がひらけたのでいそいそする ([24]132)。

鎌倉の述べる「古いもの」とは型紙ほかの資料である。

城間家側では、次のように話に応じたと城間栄喜は述べる。紅型業者は次々と転廃業の憂き目にあい、城間・沢岬・知念のみがかろうじて形付屋を営んでいたが、先代の栄光は使用に耐えない型紙300枚ほどを売り、古型紙は残した(大城精徳編1972 : P82)。

城間の話を含め、過去に調査や蒐集の妥当性に疑問を呈したことがあるが(久貝 2004 : PP105-107)、1957 (S32) 年、琉球政府初代行政主席比嘉秀平の時、

鎌倉は紅型型紙600点余を沖縄県へ返還した。この返還によって戦後沖縄の紅型復興が進展し、関係者にとっても励みとなったのは言うまでもない。

前後するが、鎌倉が型紙を返還するまで、戦後沖縄の紅型復興の複雑な歩みがある。

廃藩置県という歴史的な転換、沖縄戦という悲劇を終えてあと、存続そのものがすでに風前の灯であった紅型は、戦後紅型三宗家（または御三家）の一つである城間家の城間栄喜を中心に復興していくが、城間を奮い立たせ、紅型復興を推進したのは名渡山愛順<sup>16</sup>ほか、教育者・美術家らを中心に結成された「琉球紅型技術保存会」<sup>17</sup>であった。名渡山は、比嘉秀平と鎌倉を繋いだ人物でもあり、1954（S29）年鎌倉に直接会い、型紙の返還を願い出ている。名渡山らの幾度かの要請に応え、鎌倉が戦前に蒐集した紅型型紙・尚家伝来衣裳・陶磁器・古文書等600点以上は琉球政府へ返還されたわけである。<sup>19</sup>

ところで、資料の返還を含め、鎌倉から謙虚に学ばなければならないことが幾つかある。

第1は戦前の首里城取り壊し中止、戦後の首里城復興に尽力したことである。戦前の首里城取り壊し中止については、鎌倉は伊東に働きかけ、伊東の尽力で内務省神社局が取り壊し中止を命じた経緯がある。首里城は、さらに1925（T14）年文部省より国宝の指定を受けた。

戦後の首里城復興に関しては、1994年～2004年に行われた首里城の復元に、既述の返還された資料と沖縄県立芸術大学附属図書・資料館に4度にわたって寄贈された資料が決定的な役割を果たした。<sup>20</sup>

第2点は「琉球芸術調査」の再発見・再評価である。

鎌倉は、琉球芸術調査で得た成果を中央にもっていった。つまり、鎌倉が成果報告を行うことによって、中央で琉球芸術の価値を周知させることにつながることとなり、結果的に沖縄の人々自身が琉球芸術の価値を再発見していったのである。鎌倉の発見した沖縄の美は、県民全体に自信と誇りを与えるものとして認識された。

第3点は、精魂込めて蒐集・保管した多数の琉球芸術調査資料を返還したということ。これらの資料を蒐集・保管していなければ、大正～昭和の沖縄について現在以上に不明となった可能性がある。これら3点を踏まえ、何より沖縄

の有形・無形の文化を守ったその姿勢に、後学は学ばなければならないと考える。

後年、鎌倉はこう述べている。

首里の旅歌「踊合」の中に、御船の高艫に、白鳥が居るよ、白鳥やあらぬ、姉妹精霊というのがあるが、渡り鳥を見てもこれを姉妹の精霊として信じ祈る心象、それが沖縄の心として、紅型図案に表されている。故に紅型を継承するのは沖縄の人であり、それ以外の誰でもない。結局、私は本土からの旅人であり、数多くの資料を持ち、これを臨摸してその様式とその技法を会得していても、私としては『万葉』時代からの本土の心を歌うべきであり、そこに今日の日本人としての新しい心象の世界を表現しなければならぬと思う。それが私の型絵染の立場である（鎌倉 1976 : P171）。

「紅型」を継承するのは沖縄の人であり、「私」は「型絵染」として表現していきたいと鎌倉は述べる。自己の描いてきた沖縄イメージから脱却し、新たな地平を目指す表現者としての決意表明ともとれる記述である。

### (3) 「琉球芸術経過報告」メモから

大正13（1924）年、第1回「琉球芸術調査事業」が開始されて間もない7月5日、[36]には次のようなメモが記されている（【表B】85）。

琉球芸術調査経過報告

大正十三年七月初旬マテニ終了シタル調査

一、鹿児島市ニ於ケル諸家所蔵ノ琉球美術及諸記録ノ概要(1)

一、奄美大島ニ就キテ旧琉球王国時代ヲ語ル文化的遺品有無(2)

一、琉球芸術ノ基礎的研究トシテノ紋様資料ノ蒐集（第一部/<sup>カタチキ</sup>型付ニ現ハレタル紋様）目下継続中ノ調査

一、首里城下天徳山円覚禅寺御殿壁画ノ模写

一、古記録ナル文章ノ目録

右ノ画及御殿□□（重要カ）也

大正13年7月5日

下線部及び（ ）部分は筆者による。鎌倉はこうした予定表、或いは考察の筋道を組み立てるための目録を幾つもノートに書き記している。このメモは「琉

球芸術調査事業」の今後の方針と同年7月下旬に来沖した伊東忠太への事業の経過報告を兼ねたものである。

(1)では鹿児島市の諸家所蔵琉球美術の記録等を調査する計画を建てていたことがわかるが、計画は遂行されなかったとみてよい。しかし(2)については、第3期の奄美大島での祝女衣装・針突<sup>ハジチ</sup>・資料調査等の記録が残っている<sup>21</sup>。

第3の下線「紋様」に関し、次の[24] 189の「紋様研究」メモ等より鎌倉の意匠に対する興味深い指向が確認できる。

1. 入墨ノ種類ト様式、(首里{上流・中流・下流}、那覇、国頭、宮古、八重山、徳ノ島)
2. 時双紙ニ表ハレタル古占字、(中頭郡中城村字熱田 小橋川家(旧家))
3. 与那国カイダー一字、(附、結繩、各所ノモノ)
4. 家ノ紋所、(首里、那覇、国頭、宮古、八重山、?大島)

碑文拓本(ようとれ、崇元寺、国王頌徳、西原、瓣岳、/屋良座茂以、孔子廟…

[24] 189の「国王頌徳」は、上ノ毛にある国王頌徳碑(かたのはなの碑)のこと、「瓣岳」は弁ガ嶽のことである。

「入墨」・「古占字」・「カイダー字」の脈絡は、線を象形文字風に抽象化したグループという概念でつながるといえる。しかし「家紋」「碑文拓本」も同様に図案化された意匠として列挙されており、さらに「型付ニ現ハレタル紋様」<sup>カタチキ</sup>が同じく列挙されている。前述の琉球藝術調査経過報告「琉球藝術ノ基礎的研究トシテノ紋様資料ノ蒐集」には、型付(紅型)の蒐集が最も重要(第一部)であると記されている。これらの語群には、一見脈絡がないようにみえるが、それぞれの言葉の示す、黒い輪郭で単純化された意匠を、鎌倉は極めて近い関係として認識していた。

「紋様は声なき言語なり」([24] 164)、これは鎌倉自身の言葉である。鎌倉は何故「紋様」という言葉にこだわったのか。その根拠は、1921(T10)年6月某日、鎌倉の次の体験記から読み取れる。

…まぶしいような午後の昼盛り、崇元寺石門前に通りかかった時、その前方には梯梧の大木があつて真紅の花が咲いており、その下に小桃売りの老女<sup>ももぐわ</sup>が頭上の竹籠に手を添えて立っていた。…驚いたことにはその籠に添えた手背

の入墨が宝石のように青く光って見えるではないか（傍線筆写加筆）。それは日光の直射している場所ではない。木陰の明るい所で、珊瑚礁の白い砂の路上から照り返す反射光線<sup>22</sup>で照らし出された入墨の色である（鎌倉 1972:P180）。

その日安里八幡前で強烈な沖縄の色彩を体験した鎌倉は、さらに「各地を旅行し琉球諸島特有の神秘的な色彩現象を観察し、これをゲーテ的角度で解釈しようと念願した」（鎌倉 1972:P180）。前掲例文において、緑や真紅の鮮やかな色彩を「光」とすると、入墨は「影」である。光と影とが形成するコントラストの美、明快な線や豊かな自然の色彩が溢れる沖縄の美しさに、鎌倉は惹かれたと記しているのだが、その「光」と「影」を表現した芸術が、鮮やかな色彩に黒い隈取で紋様をえがく紅型であった。したがってこれら「紋様」に対するこだわりは、鎌倉の紅型表現、或いは芸術観を理解する上で重要な概念といえる。ノートから導かれた鎌倉の著作を概観すると、徹底的な資料蒐集と分析・考察によって琉球芸術研究が展開されている一方、芸術家的な観察力や直観力に導かれて研究テーマを開拓したとしか説明できない部分がある。琉球芸術調査の研究対象の幅広さ、資料蒐集にかける情熱は、まぎれもなく芸術家・鎌倉芳太郎の独特の美意識によってうみだされたといえる。【資料A】より[56][57][58][62]の表題は全て「紋様」という名称を含む。[1]～[12]の表題に「美術」「工芸」という名称を含んだノート群があるが、これらも「紋様」に關係するものである。「紋様」は、前掲ノート群のみならず、全81冊に通底する重要な概念であると考察する。

【表B】85に戻る。「首里城下天徳山円覚禅寺御殿壁画ノ模写」という記述について、同壁画模写資料については未見であるが、それ以外の模写については[13][15][16][17][18][19]等に多数のイラストが収録されている。これらは一部『遺宝』の「三 住居、神座」「四 衣料、装身具、入墨」の項でも確認できる。また、壁画そのものに関しては『遺宝』の「写真」の部で確認可能である<sup>22</sup>。

「写真」と同様、模写（イラストレーション）も鎌倉資料のなかのビジュアル資料として見落としてはならない重要な要素であった。例えば、『遺宝』P13～27あたりまで宮古島尻の大城ムトゥ・仲間ムトゥ・座御嶽等の神殿見取図

ほかのイラストレーションが収載されている。これらには平面図も含まれており、空中から真下を見下ろして描いたかのようなイラストとなっている。しかし、当時のカメラで、しかも空中からの撮影は出来ないと考えてよい。また、構成図と称し神殿の木組がわかるよう示している。要するに、鎌倉が見たものを鎌倉自身が編集し、読者に示しているのである。このような図示の方法は、単なる説明図よりもはるかに説得力がある。これらイラストを用いた表現については、前述したが、ダ・ヴィンチや伊東忠太ほかの先学からの影響がある。

#### (4) ノートにみる首里・那覇の調査

県を挙げて歓迎された伊東忠太の帰京後、共同名義者である鎌倉は一人首里に残り、黙々と調査研究を続ける。8月から精力的に写真を撮影して廻り、合間に琉球・沖縄関係の史料を書写・研究する日々が続く。[27]は、最初のページに「写真日記」と名付けられ、写真に関する記録で大半を占めている。例えば、8月22日に円覚寺石橋、翌日円覚寺山門の彫刻などを撮影、円覚寺周辺を集中的に撮影した様子が記録で確認できる。

ところで[27]45に「日程 調査物件」の見出しがあり、何月かは不明であるが、31日、1日から14日までの調査計画が記されている。この記録に関し、『遺宝』「あとがき」のPP277-279に、大正13(1924)年9月3日に行われた第1回「琉球芸術調査」事業の成績(目録)注が記されており、展示総数は記入していないが、以下の項目で資料展示が行われたことがわかる。

文書・土俗・絵画・彫刻・建築・漆工・陶磁工・染工・織工・刺繍・金石工・楽器・生物

その中の「建築」項は、伊東忠太の定義する宗教建築・非宗教建築と区分されており、非宗教建築の中に城堡・宮殿・民家その他が区分されている。[27]45の予定表では、尚家・首里城・社寺・陵墓・住宅と、伊東の建築区分の定義に従った形跡があるので、[27]45の不明の月は8月、調査は伊東が帰京後の8月31日～9月14日に集中的に行われたと考える。

9月上旬から10月頃まで、那覇<sup>23</sup>四町近辺を集中的に廻り、田名家訪問、天尊廟の撮影等に奔走するなど多忙な様子がメモに記されている。

[3]によると、鎌倉は同年11月1日に「カマヌニー」の高江洲康昌のもとを



訪れ陶工研究を開始、<sup>24</sup>[3]149では、窯の平面図・側面図のイラストを記録している。その他[3]については、陶工・瓦工の家譜資料、<sup>25</sup>壺屋へ頻繁に通って調査した香炉・花器・酒壺・鶴瓶など、各種の壺屋焼の寸法を記入したイラストを複数ページにおいて掲載。これらは大正末から昭和初期にかけての琉球・沖縄の陶芸研究として、また壺屋研究として現在でも貴重な記録である。

しかし鎌倉の陶芸調査は、単に壺屋焼のみを対象に行えばよいというものではなく、別の観点での研究も念頭におき、調査を行った形跡がある。それは、壺屋焼の原初の様式であるとされる南蛮甕の源流を考察する視点である。

[3]149には「大正13年11月1日午後1時午後5時マデ発掘」「建物ヲ止メタルハ明治32年頃ナリ」の記載がみえる。これらより、壺屋の陶工調査は、現在使用されていない古い窯を「発掘」という目的もあったことが理解できる。つまり、鎌倉には第2期調査の時、15世紀前後のアジア諸国との大交易時代に<sup>26</sup>ジャム(タイ)・安南(ベトナム)からもたらされたとされる蒸留酒の入れ物、南蛮甕の源流の研究という構想が、おぼろげながらあったといえる。

## (5) 職工研究と城址調査

[4]は雑工・金工に関する記事、[3]の続きである陶磁工に関する記事が収録されている。[5]は陶磁工に関するもの、「時双紙」「日本近世窯業史 第三篇」「八重山島壺瓦例帳」「瓦奉行例帳」などからの抄写あるいは書写したものを収録。[6]は染織工・縫工に関するもの、染織の調査メモや「鬱金紅花館内支配被仰付候件」「新参呉姓家譜正統」、久米島「仕賃帳」・「御用布座公事帳」・「八重山嶋農務帳」ほか地方文書の染織に関する史料からの書写を収録している。[7][8]と併せて、表題が「染織工1」「染織工2」「染色工3」となっているので、染織工として分別できる。しかし[7][8]については、日付を殆ど記入せず【表C】148・149で示す八重山・宮古の染織に関する地方文書が収録されたノートなので、成立年月日については第3期調査の可能性もある。

[36]の最初の頁はダ・ヴィンチの格言で始まり、琉球の宗教・尚家の祭祀・円覚寺・浦添御殿・建築物・波之上研究・琉球史・琉球八社について等、後のノートの基礎知識となるような資料やメモが詳細に記録されている。鎌倉は、1923年11月6日以降ダ・ヴィンチの解剖図手稿を目にし、感化されたので、ダ・

ヴィンチ格言の記録より1923 (T12) 年11月6日以降に記されたといえる。従って[27]と同年頃(1924)かそれ以前、第2期(第1期「琉球芸術調査」事業)開始以前に作成された古いノートと考える。

鎌倉の職人研究と城址研究に関するノート群を通観すると、個人史を含めたモノづくりの歴史、モノの伝播経路、祭祀又は呪術とモノとの関連等に関心を示していることが理解できる。特に陶磁工研究を概観すると、第1期(教師時代)頃の早い時期から遺跡巡りや文物調査を進める中で、蒐集した陶磁片から、南方交易の影響について構想を練っていた痕跡がある。

その後鎌倉の陶磁片研究は、単なる採集から南方交易伝播の考察へと深化する。第1期からの「琉球芸術調査」の構想に伊東忠太が参加し行われた第2期・第3期の「琉球芸術調査」事業であるが、最後(第3期)の「第2回 琉球芸術調査」事業の後、「南海篇」が構想されていたのである。この構想は、実際は鎌倉の研究成果であったが、伊東忠太・鎌倉芳太郎共著で『南海古陶瓷』(宝雲舎:1937)として完結した。

## (6) テキストとしての『球陽』

『球陽』は、『中山世譜』<sup>29</sup>『琉球国由来記』<sup>30</sup>『琉球国旧記』<sup>31</sup>とともに琉球王府の命を受けて編纂された正史の一つであるが、鎌倉芳太郎は、同書より様々な記事を引用し、テキスト或いは辞書として用いている。

美術工芸に関する[1]～[12]あたりまでは、同書の記事を手掛かりに資料収集を展開させており、鎌倉が同書を史料としていかに重視していたかを示す。つまり、実録風に編年された同書の史料としての価値を十分に理解し、多岐にわたる研究テーマの一次資料として有効に用いていたといえる。

ノートにおける『球陽』<sup>32</sup>の扱いの例を、平田典通(1641-1722)<sup>33</sup>の調査例を次に示す。

・宿藍田入閩、始学焼玉法、

宿藍田、/與那城筑/登之典通/曾隨貢使、入閩赴京、而伝授焼製瓷器、及焼料/俗叫/焼玉/之法、而帰来以焼五色珠玉以備国用、

同例では『球陽』巻7「尚貞王2年」の項より平田典通(宿藍田)の記事を引用し、必要箇所を抄書、その後平田の家譜(「宿姓家譜」・[3]157-161)を採

し、そこから幾つかの情報を得て『球陽』資料の根拠固めをする、さらに子孫と思われる人物に聞き取りを行い（[3]117）、内容を記録するなど、資料の実証性の追求を怠っていない。

以上が鎌倉の平田典通研究へのアプローチの方法である。鎌倉はその後、『球陽』等王府編纂史料をテキスト・辞書として使用、不足した情報を家譜資料・フィールドワークで補う方法を用い、幾つもの琉球研究をまとめている。

史料・家譜へのアプローチの方法については、鎌倉に最も近い人物であり、南方熊楠に『球陽』25巻の書写を送った末吉安恭が示教したと考える。末吉自身はついで琉球絵師研究を完遂し得なかったが、末吉の身近にいた鎌倉が、研究材料として『球陽』ほかの琉球近世史料を用い、琉球絵師研究としてまとめたのである。

(次号へつづく)

## 追記

筆者の「鎌倉芳太郎ノート」研究は、波照間永吉先生の御指導の下開始しました。改めて感謝し、先生の御研究がますます深化されますよう祈念申し上げます。

## 注

1. 薩州館については場所を比定できないが、旧坂元村（現鹿児島市坂元町）にあった光明寺の可能性がある。
2. この箇所には、実父と合流したことも記録されている。
3. 鎌倉芳太郎の『沖繩文化の遺宝』P61には、大正12年6月の出来事として記載されているが、野々村孝男の『首里城を救った男』（1999：PP.56-57 ニライ社）によると、東恩納寛淳の記事では同年3月末～4月初旬とある
4. 鎌倉芳太郎『沖繩文化の遺宝』P61
5. 尚典侯爵夫人祥子のこと。
6. 県庁より末原学務課長、野田警察署長、高嶺首里市長、波之上袴田宮司、マスコミ・研究者は末吉安恭、眞境名安興、伊波普猷ほか十数名が伊東のもとを訪れた（伊東1928：P477）。また中城御殿（尚典邸）、尚順邸を訪ね、滞在中に催された講演会では琉球建築・琉球美術について講話し、偶々来沖した昇署夢とも面識を得ている。
7. 伊東忠太が1893（M26）年『建築雑誌』に発表した論文。同論文が発表されて以降、日本建築史研究は進展したとされる。鈴木博之によると、同論文の特徴はギリシア神殿と法隆寺との比例・比較にある（鈴木 2003：P5）。
8. 校長は、後年中国やインドほかを旅行し、『東洋の思想』『茶の本』などでアジアや日本の文化を世界に紹介した岡倉覚三であった。伊東は明治33（1900）年、岡倉・黒川真頼・

小杉楯邸・今泉雄作ほかと共に『稿本日本帝国美術略史』の建築の部を執筆する。鈴木博之によると日本建築史における初の通史である（鈴木 2003：P12）

9. 伊東忠太『木片集』（万里閣書房：1928）。同書は大正14(1928)年、雑誌『科学知識』（科学知識普及会）に所収された1-8月号までの「琉球紀行」をまとめたもの。全42話。
10. 鎌倉はこの頃「琉球芸術調査」を行いながら、大正13（1924）年4月から大正14（1925）年9月まで、急逝した沖縄県師範学校図画科教諭西銘生楽の後任として週2時間の沖縄美術史を担当する（鎌倉 1982：P276）など多忙を極めている。伊東の「琉球紀行」では中城行きほか数か所で確認できるのみである。
11. 鎌倉は「古琉球」を日本史の室町時代頃に比定している。
12. ただし、鎌倉が在学中の東京美術学校のカリキュラムは、日本の伝統的画法を学ばせ、併せて文化財保護事業へ活かすことを意図し、幾何学・透視画法・理科・数学・漢文などの科目が設置されていたので、図面を描く基礎は既得習得していたといえる。なお、前述したノート群は、伊平屋・宮古・八重山等を訪ねた時のフィールドノートであり、イラストは殆ど現地で描いたものである。
13. 同震災は大正12(1923)年9月1日11時58分、相模湾北西80km沖を震源として起こった。
14. 鎌倉芳太郎「型絵染に関する芸術論考」（『鎌倉芳太郎型絵染作品集』講談社：1976）PP174-175
15. または紅型御三家とも。首里王府に仕えた沢岬家（大沢岬<sup>うふたくし</sup>）、知念家（唐紙知念：唐紙模様<sup>かたらし</sup>の形付を支那から習い伝えたとされる家系）、城間家の3家のこと。
16. 明治39(1906)年生一昭和45（1970）年没。琉装の女性像を描いた画家として著名。東京美術学校西洋画科卒業。鎌倉の教え子でもあった。
17. 昭和25（1950）年発足。会員に末吉安久、南風原朝光、大嶺政寛、大城皓也、大城貞成、名渡山愛順・千鶴子夫妻、屋宜元六、外間正幸、豊平良顕、渡嘉敷貞子、原田貞吉、森田永吉、仲本ヨシ子ら。
18. 兒玉絵里子『琉球紅型』（株式会社ADP：2012）PP130-131
19. 返還に関しては「約600点を琉球政府に返還し、代償として金70万円を受けたが、その金額全部を理事長笠森伝繁氏を通じて啓明会に贈り、残余の資料は研究者今後の研究課題として自由に保管するに至った」（「序」『古琉球紅型 第一期上』1967）。笠森伝繁とは啓明会理事長である。なお、残った資料も後年殆ど沖縄県立芸術大学・附属図書・資料館に寄贈した。
20. 特に「写真資料」と「乾隆三拾三年戊子百浦添御殿普請付御絵図并御材木日記」「図帳（勢頭方）」「図帳（当方）」等が復元の決め手となった。波照間永吉「鎌倉芳太郎収集の沖縄文化関係資料」『麗しき琉球の記憶 鎌倉芳太郎が発見した美』（株式会社 沖縄文化の杜：2014）P9
21. 4. 及び鎌倉芳太郎「琉球紅型放一まぼろしの隴型一」『<季刊>古美術41特集 古紅型』（三彩社：1973）PP19-20参照。
22. 注4の61～130番が円覚寺関連の写真である。その内の98～118番は壁画の全体及び部分写真が掲載されている。これらの写真資料は、既述の通り重要文化財に指定されている資料であり、芸術家として完成された鎌倉の力量が十分に実感できる。
23. 古くから港町として栄えた那覇を代表する西・東・若狭・泉崎の4つの町の総称。近世

- まで使用された。
24. ほかに新垣榮秀宅（東上門）その他壺屋一帯の陶工の窯も訪問している。
  25. 仲村渠致元（譜代用姓家譜）・張献功（張姓家譜）・渡嘉敷三良（新参阮姓家譜）・仲宗根喜元（新参珠姓家譜正統）・平田典通（宿姓家譜）・小波蔵宣凭（能姓家譜支流）の抄写が収録されている。
  26. 「大交易時代」は高良倉吉「大交易時代」『琉球の時代 大いなる歴史像を求めて』（筑摩書房：2012）による。
  27. 正確なノート表題については、拙稿「鎌倉ノートからみた「琉球芸術調査」（沖縄県立芸術大学紀要『沖縄芸術の科学』第27号 2015年 沖縄県立芸術大学附属研究所発行：PP. 74-77）を参照されたい。
  28. 初版は昭和12（1937）年10月、伊東忠太・鎌倉芳太郎共著の『南海古陶瓷』（宝雲社）。再版は昭和51（1976）年2月、鎌倉芳太郎著『セレベス沖縄 発掘古陶瓷』（国書刊行会）。同書出版までの経過は次の通り。鎌倉は1931（S6）年、那覇市で『歴代宝案』発見の報を受け、同資料の明代47冊を影写。それらを池内宏文学博士に提出、池内より琉球南海諸国交渉資料として『皇明実録』『李朝実録』との比較研究を勧められ研究開始。研究中セレベス島の古陶瓷遺跡発見の知らせを受け1936（S11）年セレベス渡島。古陶瓷600点余を採取し同年下旬に来沖、各地の城址を調査、過去の調査事業で蒐集した古陶片と合わせて比較分析を行い、同書刊行となった。
  29. 全14巻・附巻7からなる。首里王府編纂の史書の一つ。『中山世鑑』を元に蔡鐸が漢訳補訂し、尚貞33（1701）年に成立したものを、尚敬12（1724）年、子の蔡温が大幅に改訂。その後書き継がれ尚泰29（1876）年擱筆した。
  30. 首里王府編纂の地誌。全21巻からなる。尚貞35（1703）年王府は旧記座を設置、各地方に旧記・由来記等の提出を求め、旧記奉行によって琉球国の諸事由来記としてまとめられた。尚敬1（1713）年成立した。
  31. 1731年成立。本巻9、附巻11の計20巻。『琉球国由来記』を簡略化または加筆して漢文化したもの。王命によって向象賢（羽地朝秀）が著した琉球国最初の史書。全5巻。尚質3（1650）年成立。同書は、尚真王代の記述がなく、『保元物語』を引用し第一代王舜天を源為朝の子と記すなど、編纂が主観的である。
  32. 『球陽』は正巻22巻・附巻4巻・下巻の遺老説伝からなる。尚敬31（1743）年に「国初」から編纂を開始、同33（1745）年に正巻22冊・『遺老説伝』が成立する。この時の編纂担当は鄭秉哲（伊差川佑実）・蔡宏謨（久高里之子親雲上）・梁煌（当間子明）・毛如苞（和宇慶里之子親雲上）の4人。内容は、「王家の譜・政治・外交・経済・文化から役人の人事関係、間切・村の新設・統廃合・地方の行政関係・天地万物の状況・異変現象・諸百姓・士族の善行談にいたるまで網羅して」いる（嘉手納宗徳『沖縄大百科』）。
  33. 唐名は宿藍田。陶工・彫刻家。同年渡閩し瓷器及び焼料（焼玉。今でいう玉ガーラ、五色玉）の焼製法を学び、琉球へ伝えた。

## 引用・参考論文及び文献

朝比奈勝編1975『季刊 染織と生活 第九号 夏』染織と生活社  
伊東忠太1928『木片集』萬里閣書房

- 伊波普猷1974『伊波普猷全集 第1巻』 平凡社
- 大城精徳編1972『琉球の文化』第2号 琉球文化社
- 岡本恵徳1977「柳田国男と沖縄」『新沖縄文学 特集・沖縄研究の先人たち』沖縄タイムス社
- 沖縄県立芸術大学附属研究所編1998『沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵 鎌倉芳太郎資料目録』 沖縄県立芸術大学附属研究所
- 沖縄県立芸術大学附属研究所編2004『鎌倉芳太郎資料集（ノート篇Ⅰ）美術・工芸』 沖縄県立芸術大学附属研究所
- 沖縄県立芸術大学附属研究所編2014『沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵 鎌倉芳太郎資料「文献資料」目録』 沖縄県立芸術大学附属研究所
- 沖縄県立博物館・美術館2014『沖縄県立博物館・美術館企画展 麗しき琉球の記憶 鎌倉芳太郎が発見した美』（株）文化の杜
- 翁長直樹2007「自己表現を求めて 作られた主体からの脱却」『美術館開館記念 沖縄文化の軌跡 1872-2007』 沖縄県立博物館・美術館
- 鎌倉芳太郎1964「久米島嶼についての考察 ―琉球「かすり」の発祥を論ず」『季刊 南と北』第31号 南方同胞援護会
- 笠森伝繁編1925『財団法人 啓明会第十五回講演集』財団法人啓明会事務所
- 笠森伝繁編1928『財団法人 啓明会第二十八回講演集』財団法人啓明会事務所
- 鎌倉芳太郎1968『古琉球紅型 第一期 上』京都書院
- 鎌倉芳太郎1969『古琉球紅型 第二期 上』京都書院
- 鎌倉芳太郎1973「琉球紅型攷 ―まぼろしの雛型―」『〈季刊〉古美術』41 三彩社
- 鎌倉芳太郎1974「先嶋芸術と桃林寺の印象」『八重山文化』第2号 東京・八重山文化協会
- 鎌倉芳太郎1976『鎌倉芳太郎型絵染作品集』講談社
- 鎌倉芳太郎1976『セレベス沖縄 発掘南海古陶瓷』国書刊行会
- 鎌倉芳太郎1982『沖縄文化の遺宝』岩波書店
- 神坂次郎2002「俺は夏草 麦門冬―末吉安恭の人生」『歴史街道』3-5月号 PHP研究所
- 球陽研究会編1974『球陽 原文編』角川書店
- 球陽研究会編1974『球陽 読み下し編』角川書店
- 久貝典子2003「鎌倉芳太郎の琉球芸術調査（上）」『沖縄文化』96号 沖縄文化協会
- 久貝典子2004「鎌倉芳太郎の琉球芸術調査（下）」『沖縄文化』97号 沖縄文化協会
- 久貝典子2006「紅型という名前」『沖縄学』第9号 沖縄学研究所
- 久貝典子2007「紅型を通してみた鎌倉芳太郎の琉球工芸観」『民族藝術』VOL. 23 民族藝術学会
- 久貝典子2012「柳宗悦の「琉球行」をめぐって―鎌倉芳太郎の「琉球芸術調査」との比較を前提にして―」『沖縄芸術の科学』第24号 沖縄県立芸術大学附属研究所
- 芸術研究振興財団・東京藝術大学百年史刊行委員会共編1992『東京藝術大学百年史 東京美術学校篇 第2巻』（株）ぎょうせい
- 国立国語編集所編2001『沖縄語辞典』財務省印刷局
- 兒玉絵里子2012『琉球紅型』株式会社ADP
- 後藤総一郎1984「略年譜」『新潮日本文学アルバム 柳田国男』新潮社

下中弥三郎編1929『世界美術全集』平凡社  
新城栄徳1999「沖縄近代文化年表」『琉文手帖4号』琉文菴  
鈴木博之2003『伊東忠太を知っていますか』王国社  
東京藝術大学岡倉天心展実行委員会2007『岡倉天心—芸術教育の歩み—』東京藝術大学岡倉  
天心展実行委員会  
野々村孝男1999『首里城を救った男—阪谷良之進・柳田菊造の軌跡』ニライ社  
原田あゆみ1999「鎌倉芳太郎の前期琉球芸術調査と美術観の変遷」『沖縄芸術の科学 第11号』  
沖縄県立芸術大学附属研究所  
比屋根照夫1981『近代日本と伊波普猷』三一書房

※編集部注：【表B】【表C】を含め、以下は次号につづく。